



《 武勇伝① 》 「桶狭間の戦い」 織田信長 ～巧みな情報戦&天候を味方に！～



「桶狭間の戦い」は1560年に行われた、織田信長が今川義元を破った戦いです。駿河、遠江、三河の3国（静岡県と愛知県東部）を治めていた有力な戦国大名である今川義元を、尾張国（愛知県西部）を治めていた信長が破ったことは、当時の大名や武将たちに様々な影響を与えました。

この年の5月12日、今川義元は織田信長が治める尾張国への侵攻を開始し、織田方の砦を次々と落としました。一方の織田方は出撃するか、それとも本拠地である清州城で籠城をするかで意見がまとまらない状態でした。しかしその後7日後、信長は突如、清州城から出撃して義元の本陣へ襲いかかります。この時は大雨が降っていて、今川方の本陣は不安定でした。そして、義元の本陣を見つけた織田勢は何度も攻撃を仕掛け、ついに義元を討ち取りました。大将が死んだことから戦意を喪失した今川方を深追いすることなく、信長は早々に清州城へ引き上げました。桶狭間の戦いにおける信長の勝因は何だったのか？この戦いにおける今川方の兵力は25,000から45,000ほど。対して、織田方は多くても5,000だったと言われています。

また、悪天候によって今川方の本陣が乱れていたことや、信長があらかじめ今川義元の本陣が置かれていた場所を把握していたという点が挙げられます。「桶狭間の戦い」が行われた場所では視界がハッキリしない程の大雨が降っており、この混乱を利用して織田方が一気に義元の周辺に攻撃を仕掛けた結果、ついに大将首を討ち取ったということがよく語られています。さらに、戦功第一とされたのは、巧みな情報戦を信長が行ったことが勝因の証であると言われています。

さて、この「桶狭間の戦い」には徳川家康も出陣していました。今川軍の先鋒を任されていた家康は、織田軍に包囲された大高城へ兵糧を入れることを命じられます。この作戦を成功させた後、鷲津砦の攻撃にも参加しました。今川義元が信長の奇襲により戦死した時期、家康は大高城で休んでいたため、信長の奇襲に巻き込まれることはありませんでした。義元戦死の知らせを聞いた家康は、一族の菩提寺である大樹寺（岡崎）に逃げ込み、祖先の墓前で切腹しようとしたと言われています。命を断とうとした家康を思い留ませたのは、大樹寺の住職である登誉天室でした。家康は登誉天室の説得に、乱れた戦国の世を沈める決意を固めたと言われています。そして、家康はかつて松平家が居城としていた岡崎城へ戻り、晴れて今川家から自立します。織田信長が今川義元を討ち取った桶狭間の戦い。今川義元が戦死したことによって信長は天下人への道を上り始め、徳川家康は今川家から独立する機会を得ました。まさに、歴史上の転換点とも言えるこの戦いにおける信長の勝因は情報を上手く使いこなし、そして、天候を味方にするという幸運があったためと言えるでしょう。

